



TITLE:

<訃報> 佐藤長教授の訃

AUTHOR(S):

今枝, 由郎

---

CITATION:

今枝, 由郎. <訃報> 佐藤長教授の訃. 東洋史研究 2008, 66(4): 623-623

ISSUE DATE:

2008-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/141870>

RIGHT:

# 記 報

## 佐藤 長教授の訃

京都大學名譽教授佐藤長先生は、二〇〇八年一月六日京都にて九三歳で永眠された。研究者として、教育者として、そしてなにより人として、實に尊敬に値する立派な生涯を全うされた。『古代チベット史研究』（上・下）（一九五八―五九年）、「チベット歴史地理研究」（一九七八年）、「中世チベット史研究」（一九八六年）、「新舊兩唐書吐蕃傳譯注」（平凡社『東洋文庫』『騎馬民族史』第三卷所收、一九七三年）を代表とする幾多の著書・論文は、チベット研究にとって不朽の價值がある。實は『古代チベット史研究』は、「ハーヴィッツによる英語譯があるが、刊行されなかったのは、世界のチベット學にとってまことに惜しまれる。私が初めて佐藤先生にお目にかかったのは一九六八年で、太谷大學三年生でチベット佛教史を専攻していた私は、『古代チベット史研究』をとにかく読み終え、中國語・チベット語資料の博引旁證ぶりに、檢證・論述の緻密さに驚嘆した。しかし、先生が

「今は散逸して傳わらない」と述べられているある資料が、實は敦煌から出土し、大正藏經の第八五卷古逸部に所收されている寫本ではないかと思ひ當たつた。その旨を、恩師稻葉正就先生に話すと、「長さん（おさ）に直接言つたらいい」と、いとも簡単に答えられた。そこで約束も取らずに京都大學に赴き、先生が講義後研究室に戻つておられるであろう頃を見計らつて、扉を叩いた。すると中から、「名を名乗れ！」という大きな聲が返つてきたので、わたしは足がすくむ思ひがした。意を決して中に入り、來訪の旨を手短かに述べた。その間、先生は一言も發せられず、わたしが大正藏經所收テクストの寫しを差し出すと、しばらく読み入つたあと、「よく見つけた。歸つてよし」と一言だけおっしゃつた。これが、初對面であつた。その後、まだ現役であられた一九七〇年代にお目にかかった時には、一九五九年以後インドに亡命したチベット人による大洪水のようなチベット語文獻出版の前に、チベット研究はまったく新しい局面に入つていた。それを認識した上で、先生は「これからのチベット學はこの膨大な文獻を読み盡くす必要があり、わたしのような研究者の時代は

終つた」と述べられた。自身の置かれた歴史的狀況を正しく把握した上で、學問のあべき形、方法論を謙虛に追求されていた。退官後には「私は、術學的（テクニカル）と受けとられるのが嫌だつたから、後進にあまり強く言わなかつたが、中國の歴史を本當に理解するには、中國語資料だけでは不十分で、チベット語、蒙古語、滿洲語文獻も驅使する必要がある。少なくとも私の業績は、その上に成り立つたものである」と述べられたが、それは懷古的な自負であると同時に、専門化する反面、ややもすると總括的、鳥瞰的視野を失う傾向にある中國研究への警鐘でもあつた。私は先生の最晩年數年は、年に一、二回ご自宅、あるいは介護施設に赴き、一時間程先生と話すのが楽しみであつた。三、四十年前に執筆された論文の中での細部に關する質問にも、即座に答えられる記憶の正確さは、ただただ驚異的と言ふ外なかつた。二〇〇七年秋に伏見の施設でお目にかつたのが最後となつたが、その批判精神、ユーモア、爽快さは生涯變へることがなかつた。希有な人である。その學恩に深く感謝するとともに、その人柄を懷かしく思ひ出している。（今枝由郎）